**復活節第４主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年4月21日**

**「慰めの言葉」**

**申命記7章６～８節**

 **7:6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。**

 **7:7 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。**

 **7:8 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。**

**使徒言行録13章13～25節**

 **13:13 パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。**

 **13:14 パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。**

 **13:15 律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。**

 **13:16 そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。**

 **13:17 この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。**

 **13:18 神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、**

 **13:19 カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。**

 **13:20 これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。**

 **13:21 後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシュの子サウルをお与えになり、**

 **13:22 それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』**

 **13:23 神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。**

 **13:24 ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。**

 **13:25 その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から来られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』**

**新年度に入り、今日が3度目の主の日となります。私たちは新年度のスタート共に、使徒言行録のいわゆるパウロの第一次伝道旅行のスタートの所を読み進めました。それは、私たちもパウロと一緒に2024年度の伝道旅行をスタートをしました。パウロの伝道旅行が困難なことも苦労もたくさんあり決して順調には進まなかったように、私たちの伝道旅行も決して順調には進まないと思いますが、共に伝道の旅をしてその恵みを分かち合いたいと思います。**

**パウロの伝道旅行では多くの地名が出てきて聖書を読んでいるだけでは今一つ分かりにくいところがありますし、実際の伝道旅行の大変さや困難さがわかりにくいところがあります。**

**そんな時に私たちが聖書を読む助けになるのが巻末の地図です。先々週の礼拝の中でも伝道旅行の行程は触れましたが、聖書をお持ちの方はもう一度巻末の地図を見ていただきたいと思います。「7パウロの宣教旅行１」にシリアのアンティオキア教会を出発したパウロたちが、船でキプロス島に行き、キプロス島の港サラミスから徒歩でパフォスまでいきました。そこで魔術師バルイエスと出会いました。**

**そして今日の聖書箇所ではそのパフォスから再び船に乗って港町のペルゲに到着します。このペルゲで同行していたマルコとも呼ばれるヨハネは生まれ故郷のエルサレムに帰ってしまいました。そのはっきりした理由はわかりませんが、伝道旅行のあまりの大変さに耐えかねて始まったばかりの伝道旅行を早々に投げ出したのではないかと言われています。**

**14節にはこのように記されています。**

**「パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。」**

**ここだけ読んでいますと、まるで隣町に出も行ってそこで安息日、つまり主の日の礼拝に出席したように印象を持たれるかもしれません。でも、ここを聖書の地図を見るとペルゲからピシディア州のアンティオキアまで随分離れていることがわかります。この二つの町の距離は約160キロメートルあると言われています。しかもピシディア州のアンティオキアに行くにはタウルス山脈いう山を登って行かなければいけません。ピシディア州のアンティオキアは標高が約1200メートルの高地にあります。ペルゲからピシディア州のアンティオキアまで距離が160キロ、標高差1200メートルです。**

**それって日本で考えたらどうなるかなと考えてみたら、静岡市と諏訪市が似ているのです。諏訪市は標高はもう少し低いですが、距離は同じです。標高海抜数メートルの静岡市から徒歩で南アルプスの山々を越えて諏訪市にたどり着くようなものです。それだけでも大変なことは想像できますが、パウロのこの当時は山賊とか追いはぎとかがそこら中にいましたから、アンティオキアへの伝道の旅がいかに困難なものであるかが容易に想像がつくと思います。**

**なぜパウロたちが西や東の海岸線を歩いて伝道旅行をせずに、こんな険しい山道を160キロも北上して命がけで伝道旅行を進めたのかはわかりません。ただ、どう考えてもわざわざ目指さないと相当の覚悟がないと行けないこの町にあえて行くことを考えると、アンティオキアの町にどうしてもイエス様の福音を届けたかったでしょう。聖霊によって送り出されたパウロたちは、命がけでどんな困難があろうとも伝道の旅を進めていったのです。もしかしたらまだ若いマルコにはそのあたりの覚悟がまだ理解できなかったのかもしれません。**

**そして、この山の中にあるアンティオキアという町はギリシャからの移住民によって作られました。軍事的・商業的な重要な町として発展しました。またユダヤ人からすると異教の神が拝まれていたところです。そういう意味でもこのピシディア州のアンティオキアは諏訪の町に似ていると思います。**

**このアンティオキアにも熱心に神を信じるユダヤ人のユダヤ教徒がいました。そして異邦人であってもユダヤ教に改宗した人もいたのです。そのようなユダヤ人とユダヤ教徒のための会堂、つまり礼拝堂がアンティオキアにもあったのです。**

**そして、パウロとバルナバは神様を礼拝するためにユダヤ教の会堂に入りました。礼拝が始まり律法と預言者の書が読まれました。会堂長は遠くペルゲの町からわざわざやってきたパウロたちに「励ましの言葉」の語ってくれるようにお願いをしたのです。おそらく会堂長はパウロたちのたたずまいからユダヤ教の教師であるラビだと思ったのでしょう。そのラビにユダヤ教の教えを励ましの言葉を語ってくれるようにお願いをしたのです。**

**パウロは語りました。それは16節から41節まで続く長いものです。今日はその前半部分25節までを共に読んでいます。パウロが語ったこと。それはイスラエルの神が私たちの先祖、つまりアブラハムを選び出して下さったこと、出エジプトの出来事、約束の地カナンの地の相続、士師と呼ばれる裁き司の事、サウル王の事、そしてダビデを王にされたことです。その上でパウロは23節でこう語ります。**

**「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。」**

**これが16節から始まるパウロの言葉で一番言いたかったことです。神の救いの歴史、神の愛の歴史を語ってそれがイエス・キリストに繋がる出来事であると語るのです。ダビデの子孫としてこの地上に人として生まれて下さったのが、救い主イエス・キリストである、それこそがパウロがここで語りたいことでした。**

**かつてペンテコステの日に聖霊に満たされたペトロが力強く語りました。旧約聖書に書かれている救い主はイエス・キリストであると。イエス・キリストの十字架の死と復活の福音を語りました。神の愛を語りました。**

**同じく聖霊に満たされたステファノが命がけで語りました。アブラハムから始まる神様の愛の歴史を、旧約聖書を順を追って丁寧に語りました。その上で、神が救い主として与えたイエスをユダヤ人であるあなたたちは十字架に掛けて殺して神を裏切ったのだと。**

**また、異邦人コルネリウスにペトロが語ったのも、イエスはキリストである、その十字架の死と復活を語り、イエスはユダヤ人だけでなく異邦人も含めた全ての人の救い主であることを語りました。**

**今、パウロが語っているのもペトロやステファノたちと同じ内容です。神の愛の歴史、神の救いの歴史をかたり、イエスこそが神が送って下さった、旧約聖書に書かれている救い主であることを力強く語るのです。ですからパウロが語っているのは説教です。励ましの言葉とは説教なのです。**

**聞いているユダヤ人や改宗者、そしてパウロに説教をお願いした会堂長はびっくりしたと思います。ユダヤ教の教えを語ってくれると思ったら、ユダヤ教の歴史をベースにしてイエスのことを語られたのですから。恐らく初めて聞く内容だったと思います。しかし、アンティオキアのユダヤ教徒はパウロの語る説教を遮ることなく聞いています。彼らにとってはパウロが語る言葉は「励ましの言葉」ではないのかもしれません。初めて聞いたわけのわからないことだったのかもしれません。けれども、彼らはじっと耳を傾けていたのです。そこには何かを感じるものあったのではないかと思うのです。**

**「励ましの言葉」この言葉は「慰めの言葉」とも訳せる言葉です。パウロは「慰めの言葉」を語ってくださいと言われて、アブラハムから始まる神様の愛の歴史を語り、救いの歴史を語ったのです。そして神様はダビデの子孫からイエスを救い主として送って下さったことを語りました。さらにこの先ではイエス様の十字架の死と復活を語ったのです。パウロがこのように語ったのはそれこそが慰めの言葉だからです。イエス・キリストこそが慰めの言葉だから、イエス・キリストを語るのです。世に溢れている安易でなんの根拠もない慰めの言葉を語るのではなくて、神の愛そのものであるイエス・キリストをパウロは語るのです。そこにこそ真の慰めがあるのです。**

**その真の慰めをパウロは160キロ、標高差1200メートルの道のりを強い覚悟を持って命を懸けて伝えるために伝道の足を進めたのです。自分自身がイエス・キリストと出会って与えられた真の慰めを一人でも多くの人に伝えるために、険しい山道を一歩一歩とその歩みを進めていったのです。イエスこそが救い主キリストである、イエスこそが真の慰めであり**

**「いのちの御言葉」であることを、まだ見ぬキリスト者が一人でも多く与えられるために祈りつつ山の中の町を目指してバルナバと共に励まし合い助けあいながら困難な道を進んでいったのです。**

**マルコは去って行きました。けれどもバルナバは一緒にいます。パウロは一人ではありません。バルナバと共に祈りながら、助けあいながら、主から受けた御言葉によって励まし合い慰め合いながら伝道の旅を続けていったのです。**

**その姿を思う時私はかつて諏訪の地に福音を伝えたジェームス・バラ宣教師と稲垣信（あきら）牧師の姿が思い浮かびました。バラ宣教師と稲垣牧師が長野県の上田の地から旧中山道の中でも最大の難所と言われていた標高約1600メートルの和田峠を馬で越えて下諏訪の地に入り福音を宣べ伝えたのです。共に祈りながら、助けあいながら、主から受けた御言葉によって励まし合い慰め合いながら諏訪の地に福音を届ける為に伝道の旅を続けていったのです。そして諏訪教会が誕生したのです。**

**イエス様はマタイによる福音書18：20で言われます。**

**「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」**

**パウロとバルナバの伝道の旅、バラ宣教師と稲垣牧師の伝道の旅、そのどちらにもイエス様は共におられるのです。共に歩んで下さるのです。決して一人ではない、二人でもない、共にイエス様が歩んで下さる伝道の旅を大きな希望を持って歩んでいったのです。**

**それは私たちも同じです。私たちも2024年度の伝道の旅を進めています。まだ始まったばっかりです。パウロとバルナバにしてみればペルゲの町を出たばかりです。目指すピシディア州のアンティオキアは160キロも先、その姿を見ることはできません。幾多の困難や苦難が待ち構えているでしょう。あまりの困難さに逃げ出したくなる時もあるでしょう。疲れて座り込んでしまうかもしれません。さらには、慰めの言葉をイエス・キリストを語っても聞いてくれる人がいないかもしれません。語っても語っても人が集まらないかもしれません。けれども、私たちは一人ではありません。イエス・キリストが私たちと共に歩んで下さるのです。私たちは希望を持って「慰めの言葉」を語り、伝道の旅路を一歩一歩歩んでいきましょう。**